

速乾性合成封入剤

DPX デーピーエックス

速乾性に優れ、ほぼ中性の合成封入剤です。

標本がほぼ褪色しません

ポリスチレンを成分とする本封入剤はほぼ中性のため、標本の褪色がほとんどありません。永久保存用封入剤として最適です。

屈折率が高く、ベッケラインが生じません ($n_D^{20} = 1.518 \sim 1.521$)

屈折率が封入剤として最も適した範囲にあり、低倍率での鏡検でもベッケラインの問題はありません。

一定の粘度 ($600 \sim 700 \text{mPa} \cdot \text{s} / 20^\circ\text{C}$)

粘度がほぼ一定です。



主成分

- ポリスチレンポリマー 約 21.8%
- キシレン 約 69.7%

品質規格

- 屈折率 (n_D^{20}) → 1.518~1.521
- 粘度 (20°C) → 600~700 mPa · s
- 顕微鏡用途適合試験 → 封入剤として適合

DPX 使用上のポイント

1. 自動封入装置への使用について

① キシレンで十分に装置内の配管洗浄

現在ご使用中の他の封入剤から DPX をご使用されるさい、前もってキシレンで十分に装置内の配管を洗浄してください（洗浄例：キシレンを小さなビーカーなどに 50 mL 以上入れ、封入剤ボトルと同様のセットを行い、封入剤初期導入に必要な操作を 2 セット行います）。事前に配管洗浄をしないで DPX を使用しますと、現在ご使用中の封入剤と DPX が混り、白濁し、配管が詰まるリスクがあります。

② 封入剤吐出量の設定について

現在、粘度が約 550mPa・s の封入剤をご使用の場合、原則として吐出量の再調節の必要はありません。が、550mPa・s より低い粘度の封入剤をご使用の場合、現在の吐出量設定では DPX の粘度が高い（600～700mPa・s）ため実際の DPX の吐出量が少なくなります。このような場合 DPX の吐出量が多くなるように自動封入装置の吐出量を調節してください。

③ DPX は原液のまま使用

DPX はキシレンで希釈せずに、原液をそのままご使用ください。但し、原液を使用し、装置からの吐出量が少ない場合は、封入剤吐出量が多くなるよう装置を調節してください。

2. 石油系代用キシレンへの使用は不可

DPX は石油系代用キシレンで透徹した標本の封入には適しません。

3. 銀染色標本について

銀染色（ワルチンスターリ染色、他）では残留する銀イオン Ag^+ を洗浄除去するためのハイポ（チオ硫酸ナトリウム）処理を入れてくださいますようお願いいたします。ハイポ処理をしないと、経時的に発色した銀の脱色ないし褪色が生じる場合があります。

4. 封入剤の滴下量

細胞診用塗抹等の厚い標本を封入される場合、封入剤の滴下量を多めにしてください。滴下量が少ないと気泡混入のリスクが高くなります。

封入剤 DPX はヨーロッパではかなり以前から広く使用され、文献¹⁾等で紹介されています。ご使用にあたり、上記の使用上のポイントをご参考くださいますようお願い申し上げます。

参考文献

- 1) Kiernan J.A.: Histological and Histochemical Methods, Theory and Practice. 3rd ed., Butterworth-Heinemann, 1999

製品情報

製品名	注文番号	包装単位
DPX non-aqueous mounting medium	1.01979.0100.1049	100 mL
デーピーエックス	1.01979.0500	500 mL

メルク製品の最新情報はこちらから >> www.merck-chemicals.jp

本紙記載の製品構成は 2010 年 4 月 1 日現在のものです。
諸般の事情により予告なく変更となる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

メルク株式会社

パフォーマンス・ライフサイエンス化学品事業部
〒153-8927
東京都目黒区下目黒1-8-1 アルコタワー5F

Tel: 0120-189-390 / Fax: 0120-189-350
E-mail: service@merck.co.jp
<http://www.merck-chemicals.jp>

MS02-1007-1000